老舍

ちゃおつうゆえ

奥野信太郎 訳・竹麻書房

老　舍

ちやお・つうゆえ

奥野信太郎訳

●

筑摩書房

譯者略歷

明治三十二年東京に生れる。慶應義塾大學文學部卒、中國に留學、現在慶應義塾大學教授。著書に『隨筆北京』、『日時計のある風景』『隨筆東京』等がある。

昭和二十七年八月五日印刷
昭和二十七年八月十日發行

ちゃお・つうゆえ
定價 貳百貳拾圓
地方賣價 貳百參拾圓

譯者 奥野信太郎
發行者 古田晁 東京都文京區台町九
印刷者 矢部富三 東京都千代田區神田小川町二ノ四
發行所 株式會社 筑摩書房 東京都文京區台町九 電話小石川(90)五一番(業務)二〇五七番(編集) 振替口座東京一六五七六八

合資會社三松堂印刷所印刷・藤田製本

第一章

一

鐘鼓樓の裏通りに散在する下宿屋のうちに天臺と呼ぶ一軒がある。この天臺アパアトの門外には縦三尺に幅九寸五分ほどのびかひか光つた二枚の貨錄の看板に「學生專門賄附」と刻されてあつた。

が、實際にはこのアパアトの商賣が必ずしも看板通りの制限を受けるわけのものでもなく、學生專門かといへば、室室さへあれば誰であらうと學生同樣歡迎されてゐたし、必ず賄附かといへば、それも飯代と室料とは同時に帳場にわたしておく筈にはなつてゐたが、肥りすぎてゐて食を減らし肉無しですませようといふ客人でない限り、アパアトの食事で我慢のなる向きはなかつた。

天臺アパアトの商賣は看板に僞りありといふためばかりでもあるまいがぱつとしなかつた。學生生一本といふ立前ではないにしろ學生が來さへすればこれまた雀躍りして喜ぶやうなことにも出會へれば、食事がよくないとは云ひ條、ほかのアパアトでは得られない利益にありつけもした。たとへばこれはほんの些細な例ではあるが、もし客人が麻雀でもしようとすれば、アパアトの主人は年頃の別嬪の一人や二人はすぐさま呼んできて座に侍らせることができたし、酒がほしいといへば豚の膀胱に入れて北郊の高麗營(カオリイン)あたりから運搬してきた正眞正銘脫稅の「燒刀子(シヤオタオツ)」(註一)を供給してくれもした。

天臺アパアトには總計二十間間口の客室しかなかつたけれどもそこに三十人前後の客人が住んでゐる。二人で

一間間口の部屋に住んでゐるところはあつても一人で二間間口の部屋を占めてゐるところが無かつたからである。客室は一つの中庭を取り圍んで建てられたものでもなく、さりとて三つの中庭にそれぞれ面してゐるわけでもない。間をとつていへばまづ二つの中庭に分れて面してゐるといへよう。少し奇拔に説明するならば、内外の二部に分たれてゐるのだ。その内外の二部を隔ててゐるのは白堊の塗塀であつて、それには人物や妖怪の彩色畫が描いてある。ある人の話では聊齋志異のなかに出てくる物語ださうであるが、殘念なるかなこの畫が聊齋のおよそどの邊の物語だかは誰も斷定してくれた者がない。

この内外兩部の結構は著しく趣を異にしてゐる。外部は間口五間の北側、南側、西側の建物が整然たるコの字形に立ち並んでゐるが、内部は間口二間の北側のと、同じく三間の西側のと（以上で客室の間口は總計二十間になるわけであるが）それに三間半間口の南側の建物とがたつてゐる。但しこれは物置、帳場、臺所、便所が占めてゐた。

下宿の主人は考古癖のある客人たちに向つてはいつもかういふのであつた。

——下宿にならない以前大體この三軒の家は煉瓦塀で境界がしてありましてな、それが今の塗塀となりましたので、つまり塗塀はその址といふわけでして。

彼はまた涙をためてかうもいひいひしたのであつた。

——煉瓦塀のありました頃、その根つこから銅の小さな菩薩像が現れましてな、それを三圓で手放しましたところ、その後どうです別の男がアメリカ人に賣りまして、なんと六百圓の値が出たといひます。

今もつて考古癖のある人たちは思ひ出せばすぐ下宿の主人のために氣の毒がりはするのであるが、その菩薩像は一體何時代のものであつたかと重ねて尋ねるものは、ほとんど無いといつてもよかつた。

こんな鹽梅であつたので、客人たちはいづれも外部を「紫禁城」と呼び、内部を「租界」と呼んでゐた。一つは整然として嚴めしかつたし、また一つは沈んと靜まりかへつてゐたからである。「紫禁城」と「租界」といふこ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo

の二つの言葉は用ひ得て頗る打つてつけの感があつた。外部の部屋部屋はいづれも整然たるもので（十五間間口中雨漏りのないのは兩間間口だけといふ態ではあつたが）從つて室料も稍高く、住んでゐる人たちは自然幾分殿樣氣分をおびてゐた。それにひきかへ內部の方とくると地の利自ら幽僻といふわけで、麻雀をやつたり酒を飲むには持つてこいの場所であつたから、稱して租界といふのは正にぴつたりしてゐる。三尺幅の便所はこれがまた、もし會ひたくない友人や借金取にこられた時、所謂租界の外國病院の役を果たしてくれたのであつて、さながら政治家どもが病氣に託して逃避するのと同樣な機能を示した。

II

天臺アパアト中の人物を描く段になると、決してそれが生やさしいことではないといふわけは、一つには客人の出入が不定で、移轉を一種の運動的習慣と心得てゐない何人かをほかにしては、一年半年と續くものは極めて少いことと、また一つには、一人づつそれぞれ特別な形體上の構造と天賦の特性とがあるので、若しも公平に詳しく語り出すとすれば、一々彼等のために傳記の筆を進めてゆかなければならないこととのためによる。その上、一人一人の生命といふものにはすべて獨得の滋味がある以上、如何なる傳記もまた面白味無くては叶はぬものであるといはなければなるまいから。奧座敷に住んでゐる大個兒の王が好んで唱ふ斬黃袍（註二）と前座敷に住んでゐる孫明遠の小さな爆竹みたいな咳嗽ときた日には、まづ王大個兒は夜半過ぎまで斬黃袍を唱ひ續けては孫明遠の咳嗽の連發に對抗するといふ有樣で、これつぱかしの些細なことでも優に一篇の小說を成すに足るほどであつた。序に些細なことを話すとすれば、番頭の崔の大きな烟草入れにしても、ボーイの李順の袖の短かな、襟の長い、その癖首廻りのがばがばな、御丁寧にボタンのちぎれてゐる紺木綿の服にしても、十分描寫の筆に値するものである。だが天臺アパアトの眞のすがたが、決してわれわれが書くやうな粗雜簡單なものではないといふこ

とは十分知りつつも、どうしてもごく主なところだけ摘まんで簡單に筆にするよりほかはない。一人の人間、一つの事を語らうとすると王大個兒の斬黄袍と孫明遠の咳嗽とが耳につき、猩番頭の大きな烟草入れと李順の大時代な紺木綿の服とが眼にちらつくのは當り前である。或はこんなことで天臺アパアトの複雜な狀況を幾分なりとも領得できるのかとも思ふ次第である。

老夫人が柿を買ふに際しては注意して大きな奴を選び、歴史家が歴史を書くに當つては芝居の役柄でいふと紅鬚で藍の隈取り（註三）といつた人物を好んで書く。小説家は老夫人や歴史家よりいくらか聰明で、大きな柿必ずしも甘からず、紅鬚の藍隈取りすべてが英雄ではないくらゐは百も承知であながら、小説家もまた常にかういつた『御偉方好き』になりがちの過を犯しやすい。とまれ天臺アパアト全體中から何人かを選んで書くよりほかに手はないのである。

天臺アパアトのいはゆる外部の方では、第三號、五間間口北向の建物中央の部屋が最も大きかつたので誰しもこれを天臺アパアトの「金鑾殿」と認めてゐたし、第三號室の主人は主人で、儼然自ら内外兩部にわたる盟主を以て任じてゐた。

第三號室の主人といふのは天臺アパアトでも最古參の客で、彼の頭のなかには一部の天臺アパアト史がはつきりと印されてゐ、またその一擧手一投足がアパアト全體の大局にすべて影響するといふ有樣である。そればかりか第三號室の主人は實におだやかな謙恭そのものの君子人であつた。友だちに向つて禮讓を盡すことは云はずもがな、ボーイ風情に對しても、茶を淹れさせてうまく出なかつたり、酒の燗が熱すぎたりした時に「馬鹿野郎！」と美聲を張り上げることを除けば、一言だに汚ない言葉を口にすることはない。その上、第三號室の主人は「麻

雀入門」「二寶批評原理」（註四）の著者でもある。同宿人の面々は彼に親しくしてゐるばかりでなく、かかる學者と居を同じくしてゐることに自負の氣もちさへ感じてゐる。まだいふべきことがある、第三號室の主人は名正大學に於て哲學、文學、化學、社會學、植物學を、毎課目三個月づつ學んだことがあつたが、これは彼が卒業證書目あてでもなければまた學位ほしさのためでもなく、專ら學問のために學を求めたからであつた。いやそれば かりではない、この第三號の主人なるものは頭腦の側に「不孝」といふ新思想は多分にもつてはゐたけれども、兩親に對しては實に孝行息子であつた。毎月少くとも二回は兩親に手紙を出し、爲替を催促する時以外でも必ず「謹みて御安泰を奉祈上候」と書くことを忘れなかつたから。いやいやまだある……

第三號の主人の姓はといふと、百家姓の第一番目の「趙」、名は論語開卷劈頭の「子曰」である。趙子曰先生の一切はすべて彼の姓名と一致して何でも第一である。卽ち鼻であるがこれは正に天字第一號、高くて尖がり、醜くからぬ鷲ッ鼻といふ奴である。眼は先祖傳來の母狗眼、口付は西方求經の物語中に出てくる猪八戒さながらに長くて大きいときてゐる。鷲ッ鼻、母狗眼の猪八戒的な口付といへば、鷲、狗、豚で、これに加ふるに眞紅な血を通はせ、玲瓏として透き徹つた心を具へさせれば、一個の萬物の靈長たる人間、しかも人間中の人間たるわが趙子曰がここにでき上る。

彼は天より授かつたものに、かくの如く惠まれてゐるばかりでなく、世の常のことにおいても、その眷を盡したものであつた。卽ち霜が降りる頃から五七國恥記念日まで着通す眞白な麥の穗のやうに毛足の長い皮の服は、正眞正銘の甘肅產羊皮であり、飛切り新式の靴は英國皮で日本製、但し冬冷たくて夏は熱く皮の匂いがかなり遠方まで届くといふボックスの代物ときてゐる。……

道德なり學問なり言葉なりすべて彼の一切のものは他人と比較はしないことにする。（また比較の必要もないのだ）彼は永久に第一等であるから。彼は卒業證書も學位もほしくはないのだが、時にはまたかうもいつてゐる。

――學位をとる時には哲學博士も文學博士もそんなものは必要ない。世界第一の何もかも揃つてゐる總博士になりたいよ。

ここに彼としてはやや不滿なことが二つあつた。といふのは住んでゐる部屋が第三號であるといふことと、それから第一學期試驗成績の掲示を見ると他の者の姓名をすつかり讀み終へてからやつと「趙子曰」といふ心ゆくばかり墨黑々と書き出した大きな字が探しあてられたといふことである。そこで少し不機嫌といふわけであるが然り而してである、（然り而してといふ句は文章法の一大反轉である點御留意あらせられたい）アパアトの客人たちが第三號に關しては金鑾殿と呼んでゐる以上自然第一號の意味はその中に含まつてゐるわけである。また彼の姓名が掲示板のどんじりに書いてあつたことについては、鏡で映しながら「逆に讀めば第一番ぢやないか」と我と我身を勵ましてみて例の少しばかりの不機嫌も他愛ない雪のやうに消え去つてしまつた。

ところがここに前者のやうに容易に消滅するべくもない一つの不快事があつた。彼の細君は十年前は（趙子曰は十五歳で結婚した）確かに九天仙府でも第一等の脚の小さな美人であつた。結婚後三個月間といふもの愛情の激動を受け、遂に七言絶句一百首をものして彼女の可愛らしい纏足を讃美した程であつた。現に今でもどうかすると隆福寺（ロンフウスツ）の露店（註五）の古本屋で銅貨の三枚も出せば趙著するところの「小脚集」を買ふことができる。しかし今の人たちは窮屈な纏足を美しいと見なさないのみか、寧ろ異口同音に醜惡であると罵つてゐる。そこで「聖なる時代人」たる趙子曰は當然人々に追隨して美の觀念を變へざるを得なかつた。東安市場窯眞館の外に掲げてある西洋裸體美人の肖像を見るにつけても、ますますわが家にしまつてあるあの小さな醜い蹠のやうなわびしい細君のことが悲しまれてならなかつた。

彼は元來天空濶闊な朗らかな學者であつたから、正眞に眞の美を賞愛し、懇ろに人生の眞意義を求めてやまなかつた。妖氣漂ふ宗教の如きは信ずるところ更になかつた。不幸にしてあの家畜に比すべき細君の缺點に氣づいてからといふものは懊惱煩悶して宗教を信じ聊か精神上の慰めを求めるやうになつた。彼の信仰の對象物は、佛

でもなければまた孔子でもマルクスでも九尾の狐でもなく、實にそれは鐵面皮で私情の更に無い五殿閻君そのものであつた。麻雀や酒の後で少しでも靈魂上の修養においてましなところができたことに氣づくと、心から敬虔な氣もちになつて地に伏し、かう禱りはじめるのである。

——何卒邪魂追放の小鬼を差遣され荊妻御召捕りの上、このわたくし奴が新式なる美人と戀の甘さに醉へますやう、閻魔大王樣萬歲！　アーメン！

祈禱をすませると心のなかが急に輕快になつて眼の前には光がさし添つてきた。まるで自分の魂が極樂の七寶蓮池で沐浴したかのやうな氣がした。半分眼を閉ぢてみると、あの脚の小さな腐れ緣は一條の黑い線のやうに見事地獄へ向つて飛んでいつた。そのあとから金色の光が千筋萬筋さつと輝きわたり五彩照り交ふめでたさのうち無數の天女が空からひらひらと降りてくる。彼の心が原位置に復し、全身の血が脈管を元通り流れ出してみると、こは如何に眼前には百二十燭のシーメンス電燈が依然として煌々たるのに氣がついた。光明よ希望よ！　彼は無聊のうちからなほも自分を慰めようとするのである。

——さあ、もつといい氣もちにならうかな！

この「金鑛殿」のなかにおいて兩瓶の燒酒は趙子曰の肉の厚い脣から流れこんで直ちに彼の靈魂の奥をひりひりと刺すのであつた。

可哀さうな趙子曰よ！

第二章

一

第三號室はほとんど天豪アパアトの公衆會議場の觀があつた。趙子曰の勢力のあるところ衆人をよく制壓することと、第三號室がアパアト中でも一番廣い部屋であつたからである。第三號室の集談は樹林であると思へばよい。何となれば林といふものは遠くから望めばただこんもりとした綠の茂みに過ぎないが、近よれば松、槐、楡、柳それぞれの特色があるものである。彼等の談話は遠くで聞く時にはまるで一群の醉漢共がどんちやん騷ぎをしてゐるとしか思へないけれども、近くで聞いてみれば成程各自獨立不羈の主張と論調とをもつてゐるのである。

——君は昨日のあの白板を一つとるととても上りが早くなると云つたつけね！　だけど場に出てゐた一つの一第一がまた云ひ終らないうちに第二が、

——「旅舘の御亭主殿、この黃驃馬を……」（註六）の馬の字は花脣兒の調子で唱ふべきではないのだ。譚叫天（註七）が在世時分には——

いひも終らせず第三が、

——道理で小翠と張聖人との交情が破れたんだね！　元來……

この話が終らないうちに第四が、

——僕は文學科にはいつたものかしらん、それとも哲學科にはいつたものかしらん、どつちだらうねえ？　僕

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo

の性分に合つてゐるのは、一體が……

第四が續けてゐるのに皆一齊に聲を揃へて、

——學校の話なんてよせやい！

第三號室の談話はまづかういつた鹽梅で進行してゆくが、そのうちに一同の注意が何か一つのことに集中され始まると第三號室の主人公は茶碗、墨壺、その他傍にあるおよそ武器になりさうな品物を取り片づけ出す。間題集中の折には茶碗や墨壺がすぐさま飛ぶからである。これは第三號室の主人たるもの決して臍玉が小さくて流血を怕れるによるのではなくして、茶碗が壞れても一向賠償の責を負うてくれるものがないためであつた。

第三號室の談話といふものを良心的に云ふならば、いつもかうと限つたものではなく、もし國家、社會、學校等に重大事が發生した場合には、一同もまた共濟の討論と救濟の方法とに協力することができたであつたらう。不幸にして噴嚏が起つたとしても第三號室の主人は甘んじて國家社會のためにはいくつかの茶碗を犧牲にして惜しまないにちがひない。

II

夜がふけてから、もし鐘鼓樓の鐘聲が、寒々といぎたなく睡りこけてゐる北京の寢言を表現してゐるものでなかつたならば、この北京城はまるで一疋の大きな死んだ牛のやうに靜寂そのものであるといつてよい。水つぽい雪を捲いて通り魔のやうな風が少し吹いた。雪は電燈の下で飛び廻る始末の悪い白い蛾のやうに見えた。冬にはいつたばかりの季節ではあつたけれども、町角に立つてゐる巡査は首を縮めて風を避けに箱のなかに馳けこんだ。

白晝、講堂で充分睡り足りた結果として、アパアトの居住者たちは夜一向睡氣を覺えないで氣分が冴え冴えとしてゐたから、この天臺アパアトではかやうな冬の靜寂はとんと見受けられなかつた。王大個兒（ワンのつぽ）の靸（チャンポン）黄袍（パオ）は始か

ら終りまで三遍もくりかへされた。孫明遠は王大個兒の歡心を買ふべく、咳嗽を以て喝采の代りにしてゐる。奥座敷では二組の麻雀が今や眞最中で、旗色の悪い連中は荒々しく牌を投げ捨て、景氣のいい連中は微笑を浮かべながら手でテーブルの縁を拍いては王大個兒のために拍子をとつてゐる。表座敷南側の部屋に住んでゐる鼻と眼の思ひきり小つぽけな哲學者と、これはまた鼻と眼の馬鹿に大きな地理學者とは、地球は結局圓いか四角いかといふことに關して談論今や闌である。この二人の議論には全く果てしがない。ここに於てこの問題から改めて討論しなほすとしても、人間は大きな鼻と眼をもつべきか、それとも小さな鼻と眼をもつべきかといふことになつてしまふことは必定である。……

ただ北側の部屋の方爺さんだけは穏かに熟睡してゐた。彼がよくこの種の環境で睡りつづけられたのは、別に仔細があるわけではない、聾であつたからである。

第三號室では八回目の麻雀がすんで、ちやうどストライキ事件に關する會議が始まつたところであつた。趙子曰は臀の下に枕を二つあてがつてベッドの上に坐りこんでゐる。ベッドの縁に腰をおろしてゐるのは周少濂と武端、それから椅子にかけてゐる二人は莫大年と歐陽天風とである。

天章アパートには三十人前後の居住者があるのに、今この第三號室の會議に列するものただこの五名といふ理由は、宿泊居住人の全部が同じ一つの大學に通つてゐるといふわけでもなし、またよし同じ大學の學友であつたにしても省や黨の系統が同じでなかつたりして、もし十人以上の會議を開催することができたにもせよ、それは甚だしく不合理であることが明かであつたからである。

周小濂は甚だふけて見える青年であつて、腰は蝦のやうに彎曲し、痩せた黄いろい顔はまるで小さな乾いた蜜柑のやうであつた。小つぽけな眼はいつも笑を浮かべ、鼻先が紅くなつてゐてまた始終のことながらたつた今泣きやんだといふふうに見えた。笑ふのかといへば笑ふでもなく、泣くのかといへば泣くでもないかういふ顔つきは、見る人に一定の感情を起させにくいものである。かぼそい聲は七八歳位の小娘のやうであるが、聽きにくいこと

夥しく、子供の聲がよく透るのとはてんで違つてゐた。眉の上の皺はたしかに四五十歳のそれであつたが、唇の上の少しばかりの髯はその間違ひを惹き起す心配はなかつた。要するに彼は最少にしては七歳、最高にしては五十と斷定したところで何も大した相違はなかつたのである。彼は哲學を研究してゐたのであるが、時間は全部新しい詩を作るために費してゐた。自分では新しい詩をもつて彼の哲學を發表するのだと稱してゐたが、不幸にして、人々は彼の新しい詩なるものを讀んでみても、何の故にかうも曖昧なのやらとんと見當がつきかねた。彼は明暮一にも二にも新しい詩と哲學でもちきつてゐる。氣のきいた詩句を思ひつかないと、たとへ何か云はなければならない時にも默りこくつてゐる。さうかと思ふと美しい詩句でも浮かんだとなつたら、それこそ饒舌禁制の時であらうが何だらうが辯じたてずにはおかない。現在彼は古いセルの洋服の上に、鼠の中國式綿入れを重ねて着てゐる。これはいくらか新しい味はひを出すばかりでなく、洋服にはポケットがたくさんあるので、隨時詩句を書きつける紙をうんと携へて歩いても、散逸する心配がなくてすんだからだ。

武と莫の二人に至つてはこれは全く經濟學を學ぶ人間であつた。西洋では銀行の頭取も會社の支配人もいづれも經濟の專門家であり、銀行の頭取、會社の支配人といふものは十人のうち九人までは禿頭で二重顎の布袋腹のものであつて、その布袋腹の上に三尺もあらうといふ金の時計鎖を横に懸けてゐたものだといふことを彼等兩人は聞き知つてゐた。そこで二人ともできるだけ反りくりかへり、腹の皮を張り、首を縮めて後頭部の下の部分に肉を餘計出すことに努めた。この二人が異つてゐる點はなかなか多かつたが就中顯著なことといへば、莫大年の顏は縮かんだ太陽のやうに紅かつたし、武端の顏は秋の月みたいに黄いろかつたことである。莫大年の紅い顏の肉はづんぐりむつくりに見えたので世間でも彼のことをづんぐりむつくりと呼んでゐた。武端の黄いろい顏の肉もまた少からざるものではあつたが、どういふものかづんぐりむつくりと呼ぶ氣にはなれなかつた。實際人によつては彼のことを「づんぐり腫れ」と呼びたくなるところであつたらうが、よし肥つてゐるのと腫れてゐるのとは大同小異とはいへ、あからさまに口にするのもどうかと思つて遠慮しておくといつたところである。莫大年は

曾子の所謂心廣くして體胖かなりの方で、心に思つたことはどしどし口に出してしまふ。武端は心細くして體胖かなりの方かして、心には善良なことを思つてゐる癖に悪いことを云つた方がはたに受けるためにあぎと口には悪をさらけ出す。莫大年はゆつたりした綿入れに袖のたつぷりした馬褂兒といふ扮裝でちよつと呉服屋の若旦那といつた恰好、武端は黒羅紗の洋服にフランスの黄靴、一擧一動すべてが西洋臭かつた。

さて歐陽天風だが、彼は大學豫科にゐることまだ七年に滿たず、概ね二學期分つつ遅れてきた。學問に心を潜めて飽くことなく、温故知新の態度を持し、無暗に進級していつてもその根柢がしつかりしてゐなければ駄目だといふことをひたすら心に懸けてゐた。彼は趙子曰が豫科目三個月づつ學ぶといふ方法を採つてゐるのとは根本的に違つてゐたが、學問のために學を求めるといふ態度については同樣に敬服すべきものがあつた。

彼の容貌や服裝は趙子曰の樣子のよさよりも更にその十倍以上であるが、彼等二人は影の形に添ふが如き親友の間柄であつた。趙子曰は歐陽のこの美貌に對して、一向平氣の平左で、自分の醜さを露ほども感じなかつた。また歐陽天風の方では、趙子曰のこのやうな見つともない樣子に對して、安心しきつて自分の美しさといふものを雲も疑ふことはなかつた。

この兩人はさながら寺院の門に立つてゐる阿吽の仁王尊のやうなものであつたが、ただ容貌といふ點になると、まさに違つてゐた。それからもう一個所同じでないところがあつた。

それは、趙は家庭からきちんきちんと金を取りよせて入學もし、アパアトで麻雀をやつて一切合財その支拂にも廻した。歐陽は常にポケットから無けなしの錢を探り出すばかりでなく、これはまた麻雀で金儲けをして學費に廻した。もし工讀互助會が所謂半工半讀の苦學をする人たちに賞牌を贈るとしたならば、金牌は歐陽天風ゆきだといふことは疑もなく斷定できる。彼等兩人の經濟政策は根本的に異つてゐたが、麻雀は彼等の關係を一層密接ならしめた。趙子曰はもし自分が負けて金を歐陽天風に渡すやうな場合には、麻雀をすることが最も高尚な遊戯であると思ふことを除いては、無形のうちに一つの慈善事業をしたと感じたのであつた。

第三號室の會議が始まつた。

——李順！　主席の趙子曰がベッドの上に坐りこんで小さな迫擊砲のやうに叫んだ。

——李順！　李順！

何の返事もない。

——李順——。主席の顏が物でも狙ふやうに下に落ちてむつとした樣子がありありと窺へた。何の返事もない。

——李順を呼んで何をするんだい？　莫大年が尋ねた。

——瓜子兒と烟草を買ふのさ、この二つが切れてたんぢやあ司會は勤まらないやね。

趙子曰は眉を上げて鄭重にいつた。

——しかし晩いからな、大概睡ちまつてゐるぜ。莫大年はかういひながら肥つた腕の小さな金時計を見た。

——なるほど二時十分だわい。

——僕達が起きてるのにボーイは睡られまいぢやあないか。主席は昂然としていひ放つた。

——だが李順を咎めるなかれだ。

莫大年は辻潤にも李順のために辯解した。

——ねえ、八時間勞働はあたりまへの勞働制限ではなかつたかね？

——先に理窟をいふな！　奴は睡つていい、僕たちは瓜子兒を食つちやあいけないつていふのか？

主席の眞面目な元氣のいい一語は肥つちよの莫に首をひつこめさせた。

部屋のなかが瞬間靜まりかへつた。

——いや理窟なんてどうでもいい。莫大年は頭を下げて自分に向ふやうにいつた。

——人道の問題さ。

——よしきた、莫君、君のいふことを聞いてゐりやあ人道を云々して瓜子兒(コツツル)は食はないつていふんだね！　まさか烟草も——

——あ、ならもつてる！　ほれ、一本とれよ。

武端は輕快に銀のシガレットケースをぱつと開けて趙子曰に渡した。主席は猪首をやや俯向きにして烟草を一本とつた。烟草が燃えて口から吹き出すかぐはしい霧のまにまに次第に怒氣も空の彼方に消え去つた。

——僕はまだどうも修養が足らない。主席は頭をふりふり甚だ後悔にたへない樣子をして、——怒ると我慢ができないんだよ、ねえ莫君、君の話は當に聖人孔子と同じく高明だ。さあ、われわれの相談を始めようではないか。それはさうと李君はどうしてこないんだ。

——いや李君とは誰も一緒に會議なんかできはしないよ。武端はゆつくりとした口調で、——まあ考へてもみ給へ李君は、さうだ、決してストライキなんかに贊成するものか。こないのはあたりまへさ。

——主席！　周少濂は詩興すでに動いたらしく小さな鮎のやうな口を開いて最先に言葉を發した。

——今回のストライキは是非必要なものだ。見給へあの灰色の教授たちの冷酷極ることを。見給へあの校長の地獄の責苦のやうな命令の嚴重極ることを。われわれにしてもし抵抗することをしなかつたならば、直ちに心に咲く自由の花、耳に聞える夜鶯(ロシニヨオル)の歌を失ふことになつてしまふ。反對だ！　あの科學のやうな試驗、あの舊帝國的考への命令に反對だ！　彼は深く一息喘ぎこんでまた言葉をつづける。

——文學的に見てこれは僕の意見だ。

ここでまた一息いれる。

——實行方法といふ段になると、その順序が、まだ頭のなかで適當な高さにまで上つては來てゐないのだね。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo